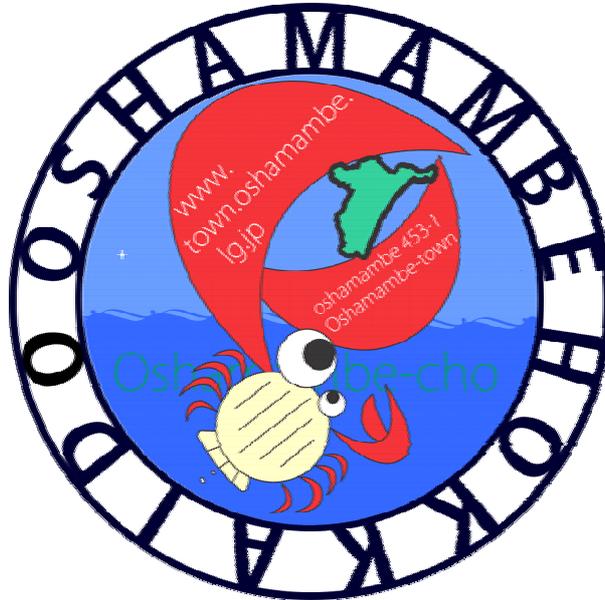


長万部町

社会科教育専攻 1年 7338 三重野広大



1. 地名の由来

その名は道内の多くの地名同様アイヌ語に由来し、直訳すると「オ（川口）シャマンペ（蝶）」、すなわち「蝶（カレイ）のたくさんとれる川口」となるのである。

すでにそれ以前から国縫あたりには、国縫川上流の砂金地に入る和人集落があったというから、やがて和人たちもアイヌの人々の呼び方で自然に呼び習わすようになったものであろう。

また「ここの山に昔から雪解けのころカレイの形に雪が残るので、これが地名になった」という説もある。実際に山の雪がカレイ形に残るかは別として、アイヌの人々に伝わる伝説が影響を与えているのである。

2. 歴史

2.1 長万部の開基

寛文9年（1669）アイヌの酋長シャクシャインが叛乱軍をひきいて攻めのぼり、国縫川をはさんで松前軍と戦ったのだが、敗走してしまったのである。この戦を境にアイヌは事実上戦力を失い、松前家の全北海道支配の足がかりとなったのである。

渡島半島の首にあたる長万部の地は、日本海側の漁場に通じる交通上の要になり、交通

量も多く、安永 2 年（1773）には番屋が建てられ、稲荷の祠ができ、番屋の幕府役人や旅行者のための宿泊の便に供されたのである。

安政 2 年（1855）幕府は松前藩のほか仙台・秋田・南部・津軽の各藩に北海道と樺太を分担警備させることにしたのである。

長万部の警備を命ぜられたのは南部藩で噴火湾を望む高台に陣屋を建て物頭久慈三蔵ら総勢 20 人が噴火湾の警備につき、これが「史跡南部陣屋」であるが、安政 4 年には廃止されたのである。

明治 6 年（1873）竹内弥兵衛が副戸長に任命され、近代国家組織の末端機構である村の首長が置かれたということで、この年をもって長万部町の開基としているのである。

2.2 道

国道五号線の同 37 号線分岐点近く、道央と道南を結ぶ主要ルート上にあり、全国的にも有名な長万部のドライブイン街。車社会隆盛によって発達したものはあるが、実は長万部の地は古くから、それぞれの時代らしい形で「交通の要衝」であったのである。

江戸時代中も、とりわけ黒松内山道の整備後は、松浦武史郎も記したように、人々は海浜を延々と歩いてこのマチを通ったのである。多くは日本海側へニシン漁の出稼ぎに行く者たちだったらしい。飲食店や宿もあったというから、徒歩や馬が交通手段であった時代にも、このマチは人々の休息地であったのである。

今日でも、長万部を通過する道南と道央を結ぶ主要国道五号線は、ドライブイン街がかくも発達するほど、北海道の大動脈として機能しているのである。

3 . 地理・気候

3.1 地形

長万部町は渡島半島内浦湾の最深部に位置し、東は内浦湾に臨み、北は長万部川をさかのぼって、島牧村・黒松内町に接し、西は今金町に、南は八雲町に接しているのである。

図 1 . 長万部の位置



出典 長万部町 HP

地形はおおむね丘陵が起伏し、大部分が山地によって占められ、平地は内浦湾に沿って帯状に分布し、長万部川・紋別川・国縫川沿いに平坦で肥よくな農耕地を有しているのである。

また、海岸のほとんどは砂浜である。

長万部町内には JR 北海道の函館本線・室蘭本線が分岐し、町内に 8 つの駅がある。国道は 5 号線・37 号線・230 号線の 3 つの主要幹線道が集中し、平成 10 年には高速自動車道長万部インターチェンジ、平成 13 年には国縫インターチェンジが開通している。将来、新幹線や地域高規格道路の実現によって、北海道の交通の重要拠点としての役割が一層高まっているのである。

3.2 気候

気候は渡島北部地域独特の南東の季節風が強く、冬期は北西の風が強いが、北部南部地区を除き積雪量は少なく、気温も比較的高くなっているのである。

3.3 その他

位置は、東経 140 度 9 分 02 秒～140 度 33 分 00 秒、北緯 42 度 22 分 04 秒～42 度 37 分 07 秒 で、面積は 310.76km²、極東：小幌海岸、極西：長万部岳、極南：ルコツ川河口、極北：蕨岱駅であり、東西最長：29.4km、南北最長：28.4km、海岸線の延長：34.5km(砂浜 28km、岩浜 6.5km) であり、標高は 4.2m(役場所在地)、高低は、最高：長万部岳、972.4m・最低：国縫川右岸国道 5 号線沿い、2.1m である

4.人口・世帯数の推移

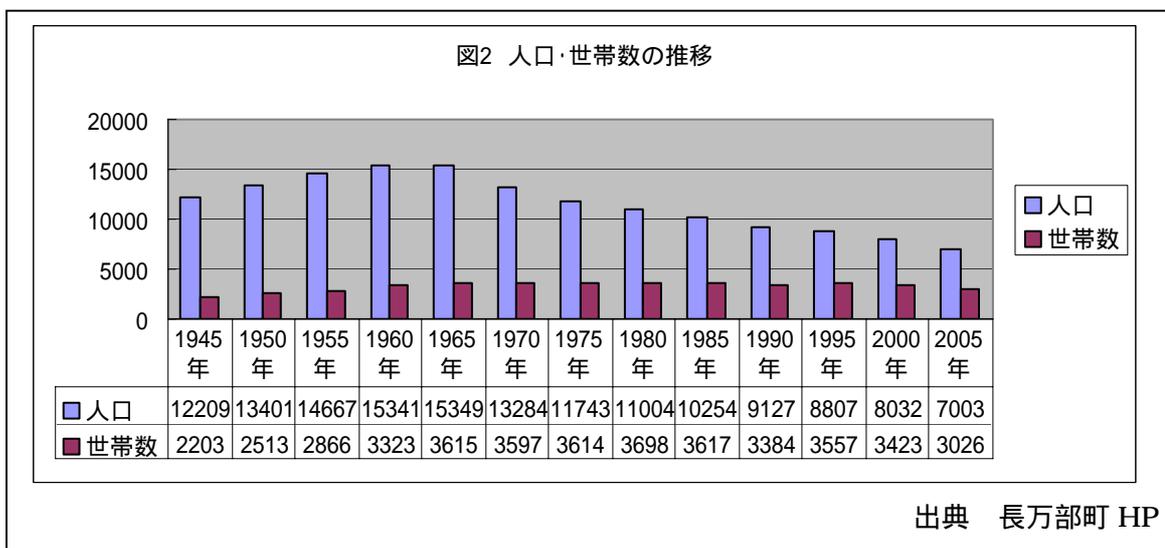


図 2 からわかるように、国勢調査によると人口は 1965 年をピークに年々減少している。2005 年～2007 年にかけては人口の増減はあまり変化はない。

世帯数は、1945 年から 1965 年までは上がり続け、その後はだいたい安定していたが、2000 年から 2005 年にかけて 400 件あまり減少している。

5 . 産業

5.1 長万部町の産業



図 3 より、第 3 次産業（60.4%）が一番割合を占めていることがわかる。次に、第 2 次産業（23.9%）、第 1 次産業（15.7%）と続いている。人口は 7460 人で、世帯数は 3511 世帯、高齢化率は 24.9%である。

5.2 長万部町の農業

長万部町の農業は、気象条件や土地条件により酪農経営を主体としており、その進展をめざし土地改良事業をはじめ草地造成など各種の農業施策を積極的に進めてきたのである。

地道な努力の結果、酪農中心の農業は集約化が進み、年々生産効率を上げることに成功したのである。しかしながら、国際的農業情勢の大きな転換期を迎え、生産調整や価格の下落など、厳しい状況が強まっているのである。

所得の向上安定のために町と農協では、さまざまな活性策を展開。酪農のさらなる集約化に加え、町の自然環境に似合った複合的農業経営のさまざまな試みがなされている。ホウレンソウ、アスパラ、カボチャなどのそ菜栽培は年々成果をあげているのである。

また牧畜では、肉牛の黒毛和牛の飼育も順調に拡大。酪農を中心としつつも、その浮沈に極端に左右されない体力ある農業を目指しているのである。

農業戸数は117戸で、農業従事者数は287人、経営耕地面積は2018.02ha、農家一戸当たりの経営耕地面積は17.2ha、農業粗生産額は149千万円である。

5.3 長万部の漁業

長万部町の漁業は、古くより農業とともに基幹産業として発展してきたが、沖に出る基地も力もなく、湾内で魚を待つだけの時代もあった。その歴史には、カレイ、マグロ、イワシ、イカ、サケ、ホッキ、毛ガニなど多くの魚介類が登場するが、豊漁はいずれも続かず、自然の生態に翻弄されつづけていたのである。

それでも大正期には漁業組合が組織され、静狩、長万部で漁港築営の請願が行われるなど、意識にも変化が現れたのである。

しかし、漁港が実現するのは戦後を待たなければならなかったのである。

戦後、静狩漁港がじっくりと年月をかけて作られるうち、漁業に新しい光が差し込んだのである。

それは養殖技術の本格導入であった。戦前にもホッキ漁獲制限やサケ孵化場設置などの試みはあったが、いずれも小規模なものであった。

とりわけ大成功を収めたのがホタテ養殖である。ホタテ生産は、貝毒や他との競合などの障害もときにあったが、漁業を安定感のある産業にしたのである。現在、漁港整備も着々と進んだ長万部町では、さらにさまざまな養殖事業への取り組みが盛んである。

ほたて養殖以外にも、ホッキ貝やウニの自然放流が行われるほか、サケ・マス、毛ガニ、カレイなど沿岸漁業の資源拡大策も重視されており、恵まれた内浦湾内の海流環境に甘んじることなく、一層の振興が図られているのである。

漁港の整備も進み、活気ある漁業の街づくりも先進的である。漁協を中心とした協同的な生産方式の試みもされ、長万部町の漁業はより安定した産業へと変貌しつつある。

5.4 長万部町の工業

図4 ホタテの養殖



写真：長万部町 HP

長万部町の工業は、食料品製造業が多くを占め、その他木材・木製品や家具・装備品製造業、窯業・土石製造業など基礎素材型の工業が主体となっていて、小規模かつ経済変動等に影響されやすい業種構成である。

現在町では、これら既存の企業の経営力強化と地域産業全般の振興に向けて、各産業間の連携の強化による1.5次産業の着実な育成や支援体制の整備を進めている。地域産業の融合は、多様な地域資源の有効利用と付加価値向上、新たな雇用の拡大などの効果をもたらしましたのである。地元産品を生かした食品加工業が年々生産を拡大し、新しい特産品開発への取り組みもさかんである。

平成9年に北海道縦貫自動車道の長万部インターチェンジが開通し、長万部町は、交通の要衝としての役割を強めた。今後、北海道新幹線の停車駅の実現も視野に入れて、このような利便性を生かした、企業誘致のための土地の確保と環境の整備を進めていく予定である。

またすぐれた自然環境の中で展開される工芸活動など、小規模ではあるものの高付加価値型の事業の定着をめざし、その誘致、育成にも取り組んで行くのである。

図5 石灰華加工品



写真：長万部 HP

6 . 観光

6.1 温泉・公園

おしゃまんべには、雄大な自然を感じられるキャンプ場やパークゴルフ場、スポーツ施設など、のんびりもしっかりも遊べる場所がそろっている。もちろんたっぷり遊んだ後は、自慢の温泉でのんびりできるのである。

図6 長万部キャンプ公園



昭和49年に開園した長万部公園は、毎年桜まつりの会場としても使用され、町民すべてが愛着を持つ場である。

広大な敷地にテニスコート、池、キャンプ場、グラウンドを備えた総合公園である。新緑の春には桜やツツジが咲き誇り、自然石に囲まれた池には夏になるとスイレンやアヤメの美しい花々が水辺に彩りを添えて

いる。

眺望が素晴らしく森林浴ができる散策路「とみのの森」が隣接。遊歩道も整備され道内でも高い評価を得ているのである。

トイレ・流し台付のバンガローもあり、広いスペースの駐車場も完備しているので、ドライブの休憩やツーリング中のキャンプにも最適である。

最盛期の8月上～中旬には、毎日300人近くが長万部の夏の夜を楽しんでいる。中には道外から毎年のように訪れ、長万部の自然に親しみながら連泊するグループもあり、道南キャンプ地の拠点として定着しているのである。

図7 ふれあい公園



ふれあい公園は長万部町市街地にあり、町民グラウンドとして利用されていた約30,000m²の区域を長万部町開基120年・町制施行50年記念事業とあわせ、まちなみづくりや他の交流施設と一体化した利用を目指すため、都市公園として整備し、1996年11月1日から全面使用できるようになったのである。

サッカー等の可能な芝張りの多目的広場、子供たちがのびのび遊べるわんぱく広場、遊戯広場などが一ヶ所に集められているのである。

ゲートボールコート、バスケットの3オン3コート、テニス練習ボード、駐車場も完備。ステージや夜間照明施設などもしつらえられ、イベント会場としても使用されているのである。

図8 二股ラジウム温泉



天然のラジウムと石灰が含まれた由緒ある温泉で、明治時代に経営が始まる以前から知る人ぞ知る秘湯で本格的な湯治客も多々訪れるのである。

湯の華利用の工芸品も人気である。日帰り入浴もできるのである。

明治時代に経営が始まる前から知る人ぞ知る秘湯として親しまれ、昭和46年に

は札幌・円山動物園にいた象の花子が湯治にきたことで、全国的に有名になったのである。現在でも全国から本格的な湯治客が訪れる、日本有数の秘湯である。

図9 長万部温泉



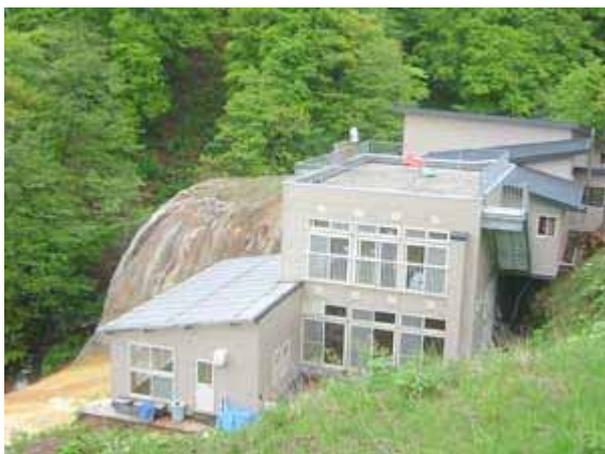
昭和の初めに個人が偶然掘り当てたガスから、町内にはガス鉱脈の存在が確認されていた。昭和29年から本格的試掘がなされていたところ、翌年、昭和30年2月、突如、ガスだけでなく、温泉も噴き出したのである。自噴を続ける井戸周辺はたちまち野天風呂化し、禁止も効果薄く、町営の仮施設が設置されたのである。

11月には売店・食堂・酒場、ついで旅館も開業し、あっという間に温泉街ができあがってしまったのである。

6.2 長万部の風景

長万部には北海道が誇ることができる素敵な風景が数多く存在するのである。

図10 二股温泉石灰華（道指定天然記念物）



石灰華は放射性の湯の華（炭酸石灰成分）が沈殿したもので、二股川周辺に広く堆積しているのである。

谷底にかけて長さ400m、幅200m、厚さ25mもある巨大な石灰華ドームは、石灰岩に湯の華がかかり、何万年もかかってできたと考えられているのである。

これはアメリカのイエローストーン国立公園の石灰華とともに世界に2つしかないという貴重なもので、昭和40年6月14日に、道の天然記念物に指定されたのである。

図 11 長万部岳



標高 974.2m の長万部岳は、ほぼ町内最陸部にそびえています。標識が十分に整備され、夏冬とも安心して登山を楽しめるのである。快晴の日には、内浦湾はもちろんのこと日本海側も眺めることができ、途上の高山植物やキタキツネ、野鳥の姿などの豊かな自然とともに、大きな魅力となっている。登山道入口には 13 名収容規模の避難小屋も設置されているのである。

図 12 小幌海岸



内浦湾内最奥部に位置し、静狩峠の絶壁と奇岩が続く岩礁によって、湾内随一の景観を誇る海岸である。昭和 51 年、静狩礼文華自然環境保存地域に指定されているのである。

岬をかわした地点には、「円空」が仏像を彫ったという由緒ある洞窟がある。陸路はなく、静狩漁港から船で 20 分程。夏には釣り好きや家族連れでにぎわっているのである。

図 13 いちい



樹齢 300 年以上、幹周り 380cm、樹高 15m 静狩開拓の人たちにとっての守り神的存在で、樹齢は推定 200～300 年。そばに祠と馬頭観音があり、9/23 にお祭りが開かれる。

(「6・観光」の写真：長万部町 HP より)

参照 HP

長万部町公式 web サイト：

<http://www.town.oshamambe.lg.jp/default.htm>